

尾崎士郎と川端康成

都 築 久 義

はじめに

今年（平成十三年）の『文芸春秋』二月号は「弔辞」を特集し、
（人生におけるもつとも厳肅な儀式に際して、人は万感の思いをこめて磨きぬかれた言葉を贈ります。昭和・平成史を彩った六十人に贈られた弔辞から、亡き人が生きた鮮やかな人生と、二十世紀という時代の全体像が浮かび上がってきます）と、「編集だより」で、その意図を記してある。

ここに載っている六十人の顔ぶれは、各界に及んでいるが、文学者は二十三人でさすがに多く、尾崎士郎もその一人に入っている。

尾崎士郎が六十六歳で亡くなったのは、昭和三十九年二月十九日。葬儀は二月二十一日に東京・青山斎場で行われた。その時に読まれた川端康成の弔辞が載っていて、わたしはそれを斎場で聞いた感動を今も鮮明に覚えている。

本稿では尾崎士郎と川端康成の友情と恩義に生きた（鮮やかな）関係を、弔辞にも述べられていた水野成夫のことにもふれつつ論じてみたい。

(一)

川端康成が尾崎士郎に贈った弔辞は、冒頭からこんな呼びかけで始まる。

先年、国際ペン大会を日本で開催した時、尾崎君、君は親友の水野成夫氏に、日本ペンクラブを助けるやうに頼んでくれたといふ。水野氏の肝いりによつて、私たちが財界の大きな支援を得られたのには、君の口添へのお陰だった。しかも君の口添へのことを私は君の死の日まで知らなくて、今、君の霊前に初めてお礼をいふ。この一事のやうに、君は言はず、私は知らずし

て交誼四十年の間に、私が君の恩を受けたことが幾たびあつたらうかと思ふと、君の温容は目に浮かび、君の温情は心にしみ、ひとしほなつかしい。君の生きてゐてくれるといふことを、そのことが私の慰めとなり、救ひとなつたこともしばしばあつた。同じ時、同じ世、同じ仕事に生きてゐたといふ縁は、年を加ふるにつれて、さびしさの深まるにつれ、ありがたいものであつた。(略)

この弔辞では、(君の人柄、君の生涯、君の仕事について君の霊前で今言ふには、はにかみを覚える。君の心やさしいはにかみを思ひ出す)と言ひ、弔辞にありがちな故人の業績や生涯は語らず、(君は言はず、私は知らずしての交誼四十年)だけ述べ、(君去つて君のやうな人はゐないのをどうすることも出来ない)と結んでゐる。川端康成が弔辞で言つてゐる国際ペン大会が東京で開かれたのは、昭和三十二年九月二日から八日までの一週間だつた。二十六カ国、三百人の参加者があつた国際ペン大会を主催したのが、日本ペンクラブ会長だつた川端康成である。

この大会の開催にあつては、資金集めのために会長の川端が、財界を廻り、支援や協力を要請すると快く応じてくれたのは、尾崎士郎の口添えで水野成夫の根回しがしてあつたのだ。こうした背景があつて感動的な弔辞が生まれたのだが、影の主役は水野成夫である。そこでまず、水野成夫の経歴と合わせて尾崎士郎の關係につい

て述べておきたい。

水野成夫は明治三十二年、静岡県に生まれ、一高を経て東京帝国大学法学部に入学し、大正十三年、仏法学科を卒業した。大学時代に社会主義研究会として著名な新人会で活動した後、日本共産党に入党し、党幹部に抜擢されたのもつかのま、昭和三年三月十五日の共産党大檢舉(三・一五事件)に連座して投獄されたが、獄中二年余、転向声明に押印して釈放された。しまねきよし「日本共産党労働者派水野成夫」(『共同研究 転向』思想の科学研究会編 平凡社 昭34・1所収)によれば、水野の転向は後の共産党幹部の転向の先駆となつた。水野成夫が革命家から企業経営者として再出発をはかるのは、昭和十五年五月からだ。前述の三・一五事件に連座し、水野と一緒に転向して出獄した南喜一が、大日本再生紙という会社を興こした際、彼も経営陣に参加し、戦争末期に国策パルプと合併して常務取締役となつた。

戦後の昭和二十二年に経済同友会が結成された時には、請われて発起人に名を連ね、しだいに財界で頭角を秀わして行つた。三十一年の文化放送を皮切りに、フジテレビ、産経新聞と次々に社長に就任し、財界で四天王と呼ばれる実力者になつた。

水野成夫はこのように若き日に革命運動に情熱を燃やしたが、一方でフランス文学に関心を持つ文学青年でもあつた。おかげで転向後も、アナトール・フランスの作品やアランの教育論などの翻訳で暮らすことができた。

水野成夫と尾崎士郎が出会ったのは、この翻訳で身を立っていた頃である。

尾崎士郎に初めて会ったのは武漢作戦の直前だった。場所は第一ホテルのロビー、紹介者は北原龍雄君。(略) 武漢作戦が終つてからだったと思ふ。白井喬二氏が数人の文士を旗亭に招いた。その席上で尾崎士郎と再び顔が合った。(略) 爾来十数年、文字通り刎頸の交をつづけて来たわけだが、——いや、彼に兄弟して茲に十数年と書いた方が正しいだらう——尾崎士郎は謂はば芳醇な酒である。

〔昭和文学全集28・尾崎士郎集〕月報 角川書店 昭29・1)

ここで水野が(武漢作戦の直前)と言っているのは、正確に言えば、武漢作戦に文学者たちがペン部隊として派遣(昭和十三年九月十一日出発)される直前のことだ。紹介者の北原龍雄は堺利彦、山川均、高島素之ら社会主義者の梁山泊だった売文社で、尾崎士郎の同志であった。尾崎はやがて売文社を離れ、社会主義運動から離脱するが、北原は第一次日本共産党の結成にかかわっている。

水野成夫と北原龍雄の關係はよくわからないが、尾崎士郎とは、昭和十四年一月に創刊された同人雑誌『文学者』で、二人とも名を載せ、尾崎が中心となっていた『文芸日本』(昭和十四年六月―昭和二十年五月)の座談会に水野は一度だけ顔を出しているが、二人

尾崎士郎と川端康成(都築 久義)

が出会った後も、頻繁には会う機会はなかったであろう。大東亜戦争のさなかには水野は企業人として多忙を極め、尾崎は花形作家であり、一年ばかりフィリピンにも出征したからである。

しかし、戦争も末期の十九年十月、尾崎が静岡県伊東市へ疎開を余儀なくされると、永福柳軒こと水野成夫との交友は親密になっていった。

伊東に疎開してからの三年間、私の上京はほとんど永福柳軒に会うためであった。空襲下の東京で柳軒と無駄ばなしをする味を覚えてからやみつきとなつたものらしい。

〔謫居隨筆〕 酣灯社 昭22・10)

尾崎が伊東に疎開中、よく会っていたのは、柳軒の他に尾崎一雄がいた。一雄とは大正末期から交友があり、当時、小田原市郊外の下曾我村の自宅で自宅で病氣療養の身であった。

一雄は戦時中から水野成夫とも親交があったから、三人で気楽な雑誌『風報』を出すことを長い間の念願としていた。それがかなつたのは、尾崎が伊東から東京に帰った昭和二十九年だった。かくして『風報』は二十九年七月から三十七年十月まで、百号を出して終刊した。

水野成夫もここには、「ふたりの母」九回、「信長醉記」二十二回、「柳軒亭醉録」十四回、その他三回ほど執筆し、毎年一月号の同人

座談会には欠かさず出席している。おそらく水野成夫も財界人として多忙ななかであって、『風報』に執筆したり、同人と語らう一時は文学者の気分を味わっていたにちがいない。とすれば、親友の依頼があつたとはいえ、ペン大会の成功のために一肌ぬいだのも「文学者」として当然だったかも知れない。

水野成夫は『風報』終刊から十年後の昭和四十七年五月四日、七十三歳で亡くなった。(水野成夫の経歴については、彼をモデルにした辻井喬の『風の生涯』(新潮社 平12・10)を参照)

(二)

川端康成は大正十二年十月、時事新報に「余燼文芸の作品」と題し、六回にわたって文芸時評を執筆し、その四回目(十月二十六日付)で次のように書いている。

尾崎士郎氏の「凶夢」(我観)は、作者の心が一ぱいに漲つてゐるだけでも、何と美しいことか。今月での力作である。主人公の心持が作者実生活の実感であるか否かは、詮議すべきことではないが、少くとも作者は主人公に非常に近く寄添ふてゐるとは云へる。実感の高潮がある。作者の実感はいくつの場合、作中人物の心理に複雑性を与へる。そして此複雑性は、描かれたもの、実在性を確かにする。此小説もさうである。主人公の心持には、自分の女の前夫に対するそれと、女に対するそれと、

自分自身に対するそれとの三つがある。この三つは彼の人生観から出発し、同時にその三つが彼の人生観へ逆に帰つて来る。之等の相交渉するところに、此小説の実感がある。(略)前に挙げた三つの心持のうち、最も重大な女の前夫に対するものよりも、女と自分に対する心持の方が、よく書けてゐると思ふ。此小説は地震後に書かれたものである。後半に地震が取り入れられてゐる。

当時の川端康成は小説家としてよりも、時事新報、国民新聞、読売新聞などに文芸時評を執筆する批評家として活躍し、その名も知られていた。従つてこの一文も川端にとつては仕事の一つだったが、尾崎士郎には格別であつた。しかし、その理由を述べるには、尾崎士郎の文壇登場と彼の文壇での評価や処遇について説明しておかねばなるまい。

尾崎士郎の文学的出発は、大正十年一月、時事新報の「懸賞短編小説」に「獄中より」が二位に入賞したことである。ついであるが一位は後述する宇野千代であつた。

「入選の感想」の中で、尾崎士郎が「創作と云へば、今度書いた「獄中より」が、とに角始めてなもので、(略)入賞しやうなどと思つてゐませんでした」とかたり、(自分に果たして作家になつて生活し得られるだけの天分があるかどうかと言ふ事が不安で、いまだに決心しかねてゐるしだいです)と述べている通り、予期せぬ幸

運だったが、小説家になる自信もなかったのである。というのも、彼はその頃、数年来かかわってきた売文社（前述）や社会主義運動に疑問を抱き、離脱を考えていた矢先、たまたま新聞で懸賞短篇の募集記事を見て応募しただけだったからだ。

しかし、この入選が改造社の山本実彦社長目のとまり、書き下ろし長編執筆の依頼を受けたことで、尾崎士郎の決心は固まり、生涯の方向が決まった。山本が尾崎に着目したのは、売文社時代の活動歴も豊富で、思想・政治系雑誌への寄稿も多く、『西洋社会運動者評伝』（売文社 大8・8）や『近世社会主義発達史論』（三田書房 大9・12）といった著書もあることだ。尾崎の経歴と筆力を見込み、プロレタリア文学台頭の時流に乗せ、文壇に送ろうとしたのである。むろん、山本には、新人を発掘して先行する『中央公論』に追いつこうという期待があった。

ところが尾崎士郎が書き上げたのは『逃避行―低迷期の人々第一部』（改造社 大10・11）と『懐疑者の群―低迷期の人々第二部』（大 11・5）という全く期待に反する作品だった。題名の通り社会主義運動から（『逃避行』する者や『懐疑者の群』を描き、社会主義運動裏面史を暴露したものだ）。

無名の新人が、時流に逆行する際物的な作品を書いていたところで、文壇が黙殺するのは当然だろう。

「『逃避行』は出版されたが文壇の反響はまるでなかった。（略）

尾崎士郎と川端康成（都築 久義）

反響はなかったとは言へないが、それはむしろ非難にみちみちたもので、殊にあの小説が旧売文社の動きを素材にした、めに、長いあひだ恩顧を蒙った堺利彦氏の激怒をまねく結果となり、それ以来堺氏との人間関係が絶たれてしまった……

（『文学的自叙伝』『新潮』昭9・12）

一方、期待を裏切った改造社の山本実彦社長には（すっかり梢気かへらせ失望させてしまった）のはいうまでもない。せっかくの改造社というバックも、山本実彦という後盾も失ったのである。

その時初めて、（僕にはたよるべき文学の先輩もなければ友人もないのだと思ひ、僕はほんとに文壇に一人ぼっちである自分を感じた。）と『文学的自叙伝』（前出）でいう。そこで千葉県御宿海岸の古寺にこもり、遅まきの文学修業に励んだものの、文壇からは見向きはされなかった。自分で蒔いた種とはいえ、そんな文壇の不遇にあつて、一条の光を与えてくれたのが、川端康成の文芸時評であつた。

大正十二年、私の執筆したのは（略）五篇であるが、この中で文芸批評の対象としてとりあげられたのは我観の「凶夢」だけである。「凶夢」を認めて、好意のある批評を『時事新報』に発表したのは川端康成であるが、おそらくこれが私の作品が、はじめて批評家から本格的に認められた最初であろう。そのと

き川端康成は、まだ東大の学生であり、私とは一見の識もなかつた。

〔小説四十六年〕

『小説四十六年』にはこれだけしか記されていないが、『酔中一家言』（講談社 昭31・5）での回想には、川端との交友は（彼が「時事新報」の月評で高く評価してくれたときから始まる）と書いている。それから半年後の、大正十三年三月、こんどは都新聞の文芸時評で、尾崎が川端康成の「篝火」（『新小説』大13・3）を（かういふ作品に対しては賞めても賞めても賞めたりない気がする）（大13・3・11）と評した。そればかりかこの作品に（私は心を打たれ）て、（彼に会うために団子坂の下宿へ訪ねていつた）という。時に尾崎は二十六歳、川端は一つ下の二十五歳だった。

ちょうどその頃はプロレタリア文学が勢威を持ち始め、文壇はプロ派、ブル派（ブルジョア）と色分けが横行し、十三年六月にプロ派の『文芸戦線』が創刊され、十月には菊池寛の『文芸春秋』同人の若手が『文芸時代』を旗揚げした。『文芸時代』の横光利一や川端康成は、「新感覚派」と称されてもてはやされた。こうした文壇状況の中で、既述のように尾崎士郎は孤立無援だった。

川端康成は、それとなく私の立場を案じて、私を「文芸時代」に近づけようと努力しただけでなく、自ら主張して同人に推薦

した。私は川端君の好意には感謝したけれども、とうとう同人にはならず終つてしまった。

〔小説四十六年〕

（三）

川端康成の「独影自命」（新潮社版全集 十四卷 昭40・10）に載っている断片的な日記の中に、（大正十四年六月十八日、尾崎士郎君も神経衰弱にて来たきやうなる手紙なりしも、あてにならず）という興味深い記述がある。

川端康成が「伊豆の踊子」（『文芸時代』大15・1・2）を執筆していた頃の数年間は、伊豆・湯ヶ島に一年のうち何か月も逗留していたことはよく知られている。その湯ヶ島へ尾崎士郎が行きたいと、川端康成に手紙を出したようだが、（尾崎士郎君も神経衰弱にて来たきやう）とあるところに、当時の尾崎の精神状況がうかがえる。

尾崎士郎がこの時期に（神経衰弱）になっていたのは、尾崎士郎・宇野千代夫婦の間に亀裂が生じていたからであろう。尾崎士郎は、時事新報の懸賞一位（既述）だった宇野千代と大正十二年の半ば頃から同棲していたが、彼女が人妻であったため、当初は「凶夢」（前出）に描いたような彼女の前夫に対することで苦しんでいた。しかし、しだいに彼女と自分の関係は、「窓にうつる風景」（『中央公論』大14・8）に活写したような互いに背中をすり合わせ、顔を反けるような間柄になってしまっていた。尾崎が川端に手紙を出し

たのは大正十四年八月だが、実際に行つたのは、昭和二年一月の
ずだ。当時の新聞に載っている文芸消息欄を調べてみると、時事新
報一月十七日付の〈尾崎士郎氏近く湯ヶ島へ行く〉が最初に目に着
く。この年は宇野千代ともども、たびたび湯ヶ島と東京を往復した
が、川端康成は四月には引き上げて、杉並・高円寺で新婚生活を始
めた。

川端康成はこの当時のことを、尾崎士郎の回想録『飄々録』（尾
崎清子私家版 昭40・2）に寄せた「人間随筆」の中で、こう言っ
ている。

昭和二年、湯ヶ島温泉に尾崎君を招いたのは私であり、また、
昭和三年に、私が高円寺から大森の馬込に移り住んだのは、尾
崎君に誘はれてであつた。そのころの湯ヶ島には多くの文学者
が来たし、馬込には多くの文人画家が住んで、異常の小世界を
つくつた。

川端康成夫婦が馬込村に移つて来たのは、昭和三年五月だが、翌
四年九月は上野桜木町へ引越したから、馬込村に居たのはわずか一
年余りだ。尾崎士郎の方はその頃、すでに結婚生活が全く破綻し、
ほとんど馬込村の家に寄りつかず、東京市内のホテルや下宿屋を転々
とする有様だつた。二人とも馬込村を去つてしまい、顔を合わすこ
ともなかつたのだが――

尾崎士郎と川端康成（都築 久義）

雨の夜に、銀座裏でひよつこり会つた私を川端康成が、彼にとつ
てあまり快適な場所でもない新宿遊廊へ私をつれてゆき、うす
ぎたない女郎の部屋で、ひとり酒を呷りながら、勝手なこと
をしやべり続けている私と一緒に一夜をすごしてくれたのもそ
の頃である。それから二、三カ月経って、またしても偶然、街
角ですれちがつた川端が、私を霊南坂上の山形ホテルへつれて
いつてくれた。私が、あたらしく立ち直るまで、このホテル生
活はそれから半歳あまりつづいた。

（『酔中一家言』前出）

尾崎士郎と川端康成の交友は、出会つて以来このように親密であつ
たが、文学的な仲間やグループとして一緒に行動したことはほとん
どないが、昭和文学史にも出て来てよく知られているのは、「十三
人倶楽部」だ。昭和四年十一月十九日付の読売新聞に、メンバーが
揃つた写真を掲載し、「反マルクス主義文学団体起る」との見出し
で「十三人倶楽部」の記事が載っている。小田切進「モダニズム文
学の展開」（『昭和文学の成立』頸草書房 昭40・7）によれば、
〈名称は尾崎士郎の命名による〉そうだが、当の尾崎は、この新聞
記事の直後に、〈この倶楽部が『反マルクス主義』を標榜するもの
でないこと〉を「個人的弁明」として同紙に送っているし、川端康
成もはっきり否定している。

三三三

浅原六郎、龍膽寺雄、久野豊彦、嘉村磯多、川端康成、尾崎士郎ら十三人で結成したこのグループは、毎月一回、新潮社に集まって四方山話に耽ったのは、川端康成のいうように〈なんとなく楽しい会合〉(『文学的自叙伝』前出)だった。尾崎はこの倶楽部のことは印象が薄かったのか、会合にはあまり出席しなかったのか、回想記類でふれていないが、結局、グループで創作集『十三人倶楽部』(新潮社 昭5・6)を出しただけで解散したようだ。小田切進に従えば、「十三人倶楽部」が生まれて半年後の昭和五年四月十三日、(この十三人倶楽部を母胎として「新興芸術派倶楽部」が結成)されたところがあるが、尾崎士郎も川端康成もこちらの方には参加していない。

ちょうどその頃は、先述の山形ホテルに止宿して、しばしの落ち着きを得た生活を送っていた時であった。そしてその年、昭和五年八月には宇野千代との関係も決着がついて正式に離婚し、十二月、放浪生活に終止符を打って、十三歳も若い恋人と大森・新井宿源蔵ヶ原で新しい生活を始めた。文壇は共産主義文学がますます先鋭化し、対抗して近代都市生活やアメリカ文化を背景にしたモダンイズム文学が横行していて、時代の波について行けず尾崎の活躍する舞台はなく、相変わらずの貧乏暮しだった。

(四)

尾崎士郎が「人生劇場」を都新聞に連載したのは、昭和八年三月十八日から八月三十日までである。「人生劇場」は大正初期、田舎から青雲の志を抱いて上京し、早稲田の門をくぐった主人公・青成飄吉の青春記だ。彼もまた当時のエリートであり、知識層に属していたが、深刻ぶった人生の悩みや知的な雰囲気をおんぶんさせているわけではない。野心に燃えて天下国家を論じ、次期学長の就任をめぐって学校騒動を起こすかと思えば、旗亭の女に惚れて侘住居で暮らし始め、昔、家に入りにしていた侠客の恩義に涙する物語だ。そこには西洋的な知性や思想はないが、功利や打算を越えた人情や情熱がいつぱいつまっている。今や喪われた日本男児の心意気と青春のロマンを描いた小説だ。

新聞の読者には好評で、「続人生劇場」が翌九年十一月から十年五月まで連載されたほどで、「続人生劇場」について(『あらくれ』昭9・11)では、〈私は前作を「青春編」と呼んだことに対して、今度の続を仮りに愛欲編と名づけてゐる〉と張り切り、さらに「続々人生劇場」(昭11・5・12)も発表し、これを「残侠篇」と呼んで読者の人気に応えた。

「人生劇場」は挿絵を画いた中川一政の尽力で、連載が終って一年半も経って、昭和十年三月に竹村書房から刊行されたが、掲載紙が〈文壇とはほとんど関係のない大部分の読者が市内の花柳界にか

ぎられていたせいでもあったが、批評家の中でもこの作品をとりあげたものは一人もいなかった」と『小説四十六年』で回想している。

そのため竹村書房も本が売れなくて頭をかかえていたところろへ、川端康成から尾崎士郎のもとへ一通の分厚い手紙が届いた。『人生劇場』を絶賛し、彼の感動ぶりを書いて来たのだ。「出した手紙・貰った手紙」(随筆集『裸』金星堂 昭14・7)によれば、川端は尾崎に手紙を出しただけでなく、ほぼ同じ内容を綴った原稿を読売新聞に持ち込み、「一度、都(新聞)にのつたものは困る」と言ふのをムリにのせさせた」という。

その川端康成の原稿は、昭和十年四月十六日の読売新聞の文芸欄のトップを飾り、「人生劇場 川端康成」の記事は四段を占める長文である。最初からすでに文芸批評としては破格の書き出しだ。

彼岸の中日、雪の日、特にその日付をこゝに誌して置きたい程、私はよき日の思ひに溢れた。尾崎士郎氏の「人生劇場」に感動してである。その日の後、私はこの小説とこの作者を思つて、幾夜か眠れず、房総の旅に出たが、まだ眠れぬ程であつた。

(略) この一編は尾崎氏が如何に立派に生きてきたか、人生を掴んでゐるかを明かにし、作家としての真価を心ゆくばかり發揮したといふに止まらず長編小説の問題、新聞小説の問題、純文学と通俗小説の問題、大人が読むに値する小説の問題、リアリズムとロマンチズムの問題、私小説の問題等にも、灯台と

尾崎士郎と川端康成 (都築 久義)

なる名作である。

川端康成がこの一文を発表すると、さっそく翌日の都新聞「大波小波」欄に青野季吉が「僕の『人生劇場』感」を書いて追隨し、一カ月余り経つて杉山平助が朝日新聞に「最近の長編小説」を連載し、「人生劇場」の型(5・27)を論じている。文芸雑誌の方は、管見では五月号の『文学界』(阿部知二)、「日本浪漫派」(淀野隆三)がいちちやくとりあげ、六月号では『あらくれ』(永松定)、『早稲田文学』(江間道助)、八月号では『三田文学』(間宮茂輔)などが続いた。こんな状況を都新聞の「大波小波」(昭10・7・25)で匿名子が(さるにても、尾崎士郎よ、かう提灯を持たれては、却つてそれこそ冷汗三斗の思ひありや否だ)と皮肉つたほどだ。

こうした新聞や雑誌での激賞を受け、竹村書房は七月に普及版の『人生劇場・青春篇』を刊行したため、評判はますます拡がった。この評判に劇団や映画会社も目をつけ、十年十月には新築地劇団が千田是也の演出で先鞭をつけ、井上正夫一座や新国劇も芝居にして上演した。

映画化の方は日活の内田吐夢監督で企画が進んでいたが、完成までに時間がかかり、公開されたのは十一年二月である。内田吐夢の「人生劇場・青春篇」は、彼の代表作としてばかりでなく、日本映画史に残る名作とも言われている。「残侠篇」の方は新聞連載中から話があり、主題歌の「人生劇場」(佐藤惣之助作詞、古賀政男

作曲)は今も演歌の名曲として歌われているのは周知の通りだ。

『人生劇場』が脚光をあび、巷間の人気を呼んだことは、尾崎士郎の文壇の地位と評価も高めたことはいまでもない。それは伝統と権威を誇る朝日新聞がすぐさま連載の執筆を依頼し、『中央公論』が戦地派遣の特派員として、尾崎士郎を最初に指名したことがよく物語っている。朝日新聞は、十一年一月から四月まで「空想部落」を連載し、『中央公論』は「支那事変」が勃発するや、総合雑誌の先陣を切って、十二年八月末、尾崎士郎を戦地に派遣した。

この間、昭和十二年七月、奇しくも川端康成の『雪国』と一緒に『人生劇場』が、第三回文芸懇話会賞を受賞した。尾崎にとつては、小説家になって初めての文学賞の受賞だ。ちなみに文芸懇話会賞は、第一回に横光利一、第二回に徳田秋声などが受賞し、第三回を最後にして文芸懇話会は解散した。かくして尾崎士郎の、人気と評判は一世を風靡し、当代随一の花形作家となつて、文壇の中央に押しやられた。

まさに川端康成の一篇の文芸時評での絶賛の一文が、尾崎士郎の人生を変え、生涯を決定したのである。それゆえ尾崎にとつては、川端がまさきにくれた〈手紙の内容は、今でも一字一句覚えていゝる〉(『小説四十六年』)し、その時の感激と彼の友情は、生涯にわたって尾崎から離れなかつたのである。

『小説四十六年』の次の一節には、それがひしひしと感ぜられる。

「読売新聞」の文芸欄に発表された川端康成の「人生劇場」という文章は、大体私におくられた手紙から抜粋したものである。川端君とは大正時代から昭和の初年ごろまで親しく交遊がつづいていたが、それからあとの数年間、まったく会う機会がなかつた。彼の言葉のひびきはそのまま文壇に反映し、「人生劇場」を中心とする、あたらしい空気がもりあがつてきた。(略)不幸な「人生劇場」の運命が一変したことは改めて説くまでもあるまい。おそらく、日本の文壇史をかえりみて、こういう意味の認められ方をした作家は一人もいなかったであろう。私は悲痛な感慨にうたれた。うれしいなぞというケチな気持ちではない。

思えばかつて文壇に登場した頃、誰からもまともに批評さえしてもらえなかつたのに、最初に評価し、認めてくれたのは川端康成であった。そして、尾崎士郎風にいえば、「男にしてくれた」のも川端康成であった。その〈悲痛な感慨〉の恩返しだが、国際ペン大会開催のための資金集めに奔走する川端康成への恩返しとして、財界の実力者となつた水野成夫への口添えとなつたのである。そのことを尾崎士郎の死後に知つた川端康成もまた〈悲痛な感慨〉を覚え、それが感動的な弔辞となつたのだとわたしは思う。